

氏 名 王 亜 婷
学位の種類 博士(文学)
学位記番号 甲 第68号
学位授与の日付 2021年3月18日
学位授与の要件 学位規則第4条第1項 該当
学位論文題目 **前置き表現に関する日中対照研究**
—日中シナリオの分析に基づく語用論的考察—

学位審査委員 主査 教授 藤原雅憲
副査 准教授 中川美和
副査 教授 王文亮

論文内容の要旨

本研究では、前置き表現に関するアンケート調査を通じて、話し手(中国人日本語学習者[CJL])がどのような言語表現を使っているか、学習者の前置き表現の認知度を明らかにした。また、日本語母語話者(JNS)と中国語母語話者(CNS)の比較することによって、「依頼」「断り」「状況説明」「意見表明」という場面における言語行動の違い、および前置き表現の使用状況を考察した。さらに、日中ドラマ・映画に現れた前置き表現使用例を用いて日中対照研究を行うことによって、日中両言語の前置き表現の共通点・相違点、言語使用の特徴を明らかにした。調査結果に基づいて、日本語教育の場に前置き表現についての学習を導入すべき理由を述べた。本論文は全六章からなる。以下に本論文の概要を記述する。

第一章では、研究背景と問題提起、本研究の目的と意義、研究方法、および構成を述べた。

第二章では、前置き表現に関するアンケート調査を通じて、CJLの前置き表現に対する認知度、およびJNSとCNS、CJLによる、「依頼」「断り」「状況説明」「意見表明」という場面での言語行動の違い、前置き表現の使用状況について分析・考察した。その結果、CJLの前置き表現に対する認知度は低いという現状があり、前置き表現に関する知識が不足していたが、学習者の日本語学習後の変化に関する4つのコメントをまとめたところ、学習者はコミュニケーションにおける相手への配慮についての意識を持っていることがわかった。また、「依頼場面」においては、JNSの約8割「すみませんが…」という聞き手に配慮した前置き表現が現れるという結果を得た。CJLは「詫び先行型」を多く使用し、CNSが本題に入る前に「状況確認先行型」という相手の状況を尋ねることが多く、「直接型」が少ないこと、「断る場面」においては、CNSはJNSより「詫び先行型」前置き表現の使用率は低いこと、また、JNSと同じように相手に共感を表す表現を使っていることも明らかになった。「状

況説明の場面」においては、CNSとCJLがJNSより簡単な説明になる傾向があり、主題に早めに入る気持ち強いということがうかがえた。CJLは「謙遜表明型」前置き表現を多く使用し、自分自身のことを謙遜することによって相手への配慮を示していることもわかった。「意見表明の場面」においては、「相手の意見と異なる場合」について、CJLは「意見を言う」が、JNSは「意見を言わない」という違いがあった。「目上の人と雑談する場合」では、JNSは自分の意見を表明することより上下関係を重視し、目上に対しては、尊敬を表して上下関係を優先させるということがわかった。

第三章では、日本のテレビドラマの会話用例を研究データとして、日本語会話に見られる前置き表現を分類・分析し、会話の展開パターン、前置き表現の機能および効果的なコミュニケーション・ストラテジーについて分析した。その結果、収集した会話用例を全て陳(2007)の前置き表現の6つの分類に判然と分けることができず、6つの分類にできなかった用例を張(2014)の言語形式による分類した。このような用例は前置き表現以下の言明が相手の意向に添わない内容であることを伝達している共通し、相手に選択の余地を残すという配慮の表れであるが、前置き表現に入れるかどうかは確定できなかった。そのため、「準前置き表現」と名付けた。「準前置き表現」が存在することが明らかにした。次に、日本語の会話の展開パターンは、「呼びかけ(任意 [オプション])」→「相手への配慮を含む前置き表現」あるいは「話題・様態を提示する前置き表現」→「主題部」のような要素から構成されることがわかった。「意見の表明」「依頼のしかた」「断り」という言語機能が上記の展開パターンに則って実現されていることを分析した。前置き表現は、「依頼」や「断り」「意見表明」によって生じる相手の不快感を修復し、自らの意図を実現しやすくするために用いるストラテジーとしての機能を果たしているということを明らかにした。

第四章では、『小时代I』『杜拉拉升职记』『中国合伙人』『奋斗』『蚂蚁的梦想』『格子间女人』『等风来』という中国の映画における前置き表現396例を分析し、中国語における前置き表現の特徴を考察した。それらの結果と第三章の日本語の前置き表現用例を比較し、使用状況と日中両言語の相違点について分析した。その結果、使用状況について、中国語用例396例のうち、「意見表明の場面」では、前置き表現の使用が最も多く、117例である。「直接表明」と「否定」が最も多いことがわかった。次に、陳(2007)における日本語前置き表現の6つの分類に対応する中国語用例は少ない。そこで、中国語の特徴を表す前置き表現について、「注意喚起」「話題提示」「挨拶」「準前置き表現」「挿入語」の分類から用例を分析した。その中で、司(2015)に従って、中国語の“怨我冒昧”(恐縮ですが)“简单地” (簡潔に申しますと)“我跟你” (あの…)などの言葉は挿入語に属しているとみなした。さらに、日中両言語は呼称の使用について、大きな違いがあることが明らかになった。

第五章では、中国語映画7本の会話用例では呼称が多用されているため、前置き表現としての呼称の用例について分析した。「依頼」「断り」「状況説明」「意見表明」等という言語行動について、場面の異なりや親疎関係等の社会要因が与える影響の分析を行うことによって、中国語の前置き表現の中で、「呼称」に焦点を当て、ポライトネスの観点から語用

論的に考察した。その結果、中国語では、「依頼場面」においては、職場においても「親族呼称」が使われているということがわかった。「断る場面」においては、上下関係に関わらず、始めに感謝の言葉を示してから断るほうが相手にとって納得しやすい。「尋ねる場面」においては、「呼称」と「詫び前置き表現」を使ったほうが聞き手はより進んで教えてくれるのである。「意見表明の場面」においては、呼称を使用することは自然であり、“不好意思”（すみません）などの前置き表現と同じ機能を持っていることがわかった。「状況説明の場面」においては、「呼称+挿入語」の言葉を用いて相手の注意を引き、状況説明の内容に集中させることがわかった。上下・親疎関係から見る呼称について、中国語では、上下関係、年齢より親近関係が優先されている。年齢が近い上司に対して、フルネーム、名だけを使用して呼びかけることによって、相手の面子を重んじるポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを行使している。呼称の選択には、親疎関係、血縁関係も要因となっていることが明らかにした。

第六章では、各章の主な結論・調査結果についてまとめた。その上で、本論文の日中両言語の前置き表現の共通点・相違点、および日本語教育の場に前置き表現についての学習を導入すべき理由を述べた。日中両言語の前置き表現に関する主な共通点は次の6つのことにまとめられる。(1)相手への配慮を含む(2)伝達・導入する効果(3)言語機能(4)依頼する際の前置き表現の機能(5)断る際の前置き表現の機能(6)意見表明する際の前置き表現の機能。次に、主な相違点は、「(1)意見表明の仕方(2)日本語の「様態提示」前置き表現と中国語の挿入語(3)会話展開パターン(4)呼称の使用」について4つのことにまとめられた。さらに、日本語教育の場に前置き表現についての学習を導入すべき理由は、「(1)前置き表現の使用について不適切な場合がある(2)中国人日本語学習者の前置き表現に関する知識や認知度の不足(3)学習者の前置き表現の使用理由」の3点にまとめられる。

今回の日中対照研究を通じて、日中両言語の互いの共通点を認識し、相違点についてもより深く考察することができた。しかし、日本語学習者は前置き表現に関する認知度が低いという現状があるため、異文化間のコミュニケーションにおいて、日中両言語の違いを理解できなければ不快感が生じやすいであろう。今回の調査結果から考えると、日本語教育の場に前置き表現についての学習を導入すべきであると思われる。

最後は各章の分析が十分に行えなかったことを今後の課題としてまとめた。

審査結果の要旨

論文タイトルにある「前置き表現」とは、会話の主目的である本論に入る前に使われる文言を指し示す用語である。次の例（１）に使われている「すみませんが」がその代表である。

例（１）

A：すみませんが、小皿、取っていただけませんか。

B：はい、どうぞ。

英語会話の例（２）における「Are you busy?」も本論に入る前の前置き表現である。

例（２）

Her: Are you busy?

Him: Not really.

Her: Check over this memo.

Him: Okay. G. Yule(2000). *Pragmatics*,

G.Yuleは「Are you busy?」のような文言を、依頼 (request) に入る前段階 (pre-request) と見なしている。

では、なぜ前置き表現を用いるのか。その問いに対してポライトネス理論が有効である。ポライトネス理論というのは、Brown, P & S. Levinson (1987) が提唱したもので、近年の会話研究・語用論研究の基礎となっている。それによれば、私たちは会話を通して相手と交流する際に、相手の面子 (face) を守ろうと努力しているとす。面子には、他者に認められたいという **positive face** と、他者に自らの領域を侵犯されたくないという **negative face** というの2つの種類があるという。 **positive face** に訴えて相手との絆を強めることを **positive politeness** といい、 **negative face** を考慮して相手への負担を軽減することを **negative politeness** という。

本研究は、日中両言語の前置き表現の分析を通して、日本語が **negative politeness** を重視することに対し、中国語では **negative politeness** だけでなく、 **positive politeness** を行使することにより相互の関係を緊密にし、依頼や勧誘といった言語行動を速やかに遂行していることを明らかにしたものである。

本論は全6章から成る。第一章で研究背景の説明と問題の提起、研究の目的を述べた後、第二章では前置き表現に関するアンケート調査を通じて、中国人日本語学習者(以下、CJL)の前置き表現に対する認知度、および日本語母語話者と中国語母語話者ならびに CJL による、「依頼」「断り」「状況説明」「意見表明」という場面での言語行動の違いや前置き表現の使用状況について分析・考察を行っている。その結果、CJL は前置き表現に対する認知度が低いが、学習が進むにつれて相手への待遇意識が徐々に高まっていることが明らかになり、「依頼」、「断り」、「状況説明」、「意見表明」という4つの場面で前置き表現の使用が顕著であると述べている。

第三章では、日本のテレビドラマの会話用例を研究データとして、日本語会話に見られる前置き表現を分類・分析し、会話の展開パターン、前置き表現の機能および効果的なコミュニケーション・ストラテジーについて分析している。分析は、陳(2008)及び張(2014)という先行研究を踏まえたが、両者の研究で指摘されていない前置き表現が存在することを明らかにし、それを準前置き表現と命名した。「依頼」会話の展開パターンは概ね、「呼びかけ(オプション)」→「相手への配慮を含む前置き表現」または「話題・様態を示す前置き表現」→「主題部」となっていることを示した。この展開パターンにおける前置き表現は、「依頼」を始めとする諸機能実現によって生じる相手の不快感を修復し、自らの意図を実現しやすくするために用いるストラテジーとしての機能を果たしているということを明らかにした。

第四章では、『小时代I』『杜拉拉升职记』『中国合伙人』『奋斗』『蚂蚁的梦想』『格子间女人』『等风来』という中国の映画における前置き表現396例を分析し、中国語における前置き表現の特徴を考察し、さらに、考察の結果と第三章で扱った日本語の前置き表現と比較し、日中両言語の相違点について分析している。その結果、中国語会話では、「意見表明」の場面においてのみ前置き表現が多く用いられている(396例のうち117例)が、概ね、前置き表現がなく、直接的に主題部に入る例が多く見られたと報告し、日本語の前置き表現に対応する中国語例が少ないことを確認している。そのため、中国語の“恕我冒昧”(恐縮ですが)、“简单地说”(簡潔に申しますと)、“我跟你说”(あの…)などの言葉は挿入語に属していると思なしたほうがよいと主張している。また、前置き表現の少なさを補うかのように、呼びかけが多く用いられていることを示して、呼称の使用の重要性を指摘している。

第五章では、中国語映画7本の会話例で呼称が多用されているため、前置き表現としての呼称の使用例を分析している。「依頼」「断り」「状況説明」「意見表明」等という言語行動を取り上げて、場面の異なりや親疎関係等の社会要因が与える影響に着目し、「呼称」の使用をポライトネスの観点から語用論的に考察している。その結果、中国語では、「依頼場面」では、職場においても「親族呼称」が使われているということが明らかになった。また、「尋ねる場面」においては、「呼称」と「詫び前置き表現」を使うことで、聞き手がより進んで教えてくれることが示された。「意見表明の場面」においては、呼称を使用することは自然であり、“不好意思”(すみませんが)などの前置き表現と同じ機能を持っていることが明らかになった。「状況説明の場面」においては、「呼称+挿入語」の言葉を用いて相手の注意を引き、状況説明の内容に集中させることができることが示された。呼称の使用に関しては、上下関係や年齢より親近関係が優先されていることが明らかになり、年齢が近い上司に対して、フルネームまたは名だけを使用して呼びかけることによって、相手の面子を重んじるポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを行使していること、呼称の選択には、親疎関係、血縁関係も大きな要因となっていると結論付けている。

第六章では、日中両言語の前置き表現の共通点・相違点、および日本語教育の観点から前置き表現について考察を加えている。日中両言語の前置き表現に関する主な共通点は次

の 6 つの点にまとめられるとして、(1)相手への配慮を含む、(2)伝達・導入する効果、(3)言語機能、(4)依頼する際の前置き表現の機能、(5)断る際の前置き表現の機能、(6)意見表明する際の前置き表現の機能を挙げている。次に、主な相違点として、(1)意見表明の仕方、(2)日本語の「様態提示」前置き表現と中国語の挿入語、(3)会話展開パターン、(4)呼称の使用という 4 つの点を挙げている。さらに、日本語教育の場に前置き表現についての学習を導入すべき理由を、(1)前置き表現の使用について不適切な場合がある、(2)中国人日本語学習者の前置き表現に関する知識や認知度の不足、(3)学習者の前置き表現の使用理由の 3 点にまとめている。

本論文で評価すべき点は、まず、ドラマ『半沢直樹』全編および中国語映画 7 本のシナリオという膨大なデータを丹念に渉猟し該当する用例を抽出して分析した点にある。さらに、前置き表現の日中対照研究を精緻に進め、中国語の呼称に関するポライトネスを明らかにしたことを高く評価したい。次に、申請者自身がかつて日本語学習者であった経験を生かして、前置き表現の習得に着目して調査を実施した点を評価したい。発音や語、文法の習得に焦点を当てた研究は数多くあるが、談話構成の 1 要素である前置き表現の習得を対象とした研究は少なく、その意味で画期的な研究であると言っても過言ではないだろう。

惜しむらくは、アンケート調査において調査項目の作成にやや不注意な部分が見受けられた。項目 P の回答が「はい」と「いいえ」に分かれた場合に、「はい」という回答を前提にして後続の項目が設定されているが、「いいえ」という回答に対して指示がなされていない点が不注意であると最終試験で指摘を受けた。調査結果を左右するほどのミスではなかったが、今後の調査においては細心の注意をもって臨まれることを願うものである。

論文の評価基準である「先行研究」、「論理性」、「独創性」、「文章表現・書式体裁」、「倫理上の問題」はいずれも「A」と評価し、論文審査及び最終試験の結果を「合」と判定した。